



國立臺灣博物館 鐵道部園區



SNET台湾 みんなの台湾修学旅行ナビ
https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_north/356/



エリア

台北市

テーマ

歴史

建築

交通

国立台湾博物館 鐵道部園區

「モダン」を運んだ歴史の証言者

国立台湾博物館には、本館以外にも、古生物館、南門館、北門館(鐵道部園區)と多様な展示スポットがあります。古生物館、南門館、鐵道部園區はいずれも台湾の経済を支えた場所を再利用したという共通点があります。鐵道部園區はもともと、清朝時代には台北機器局(兵器・鐵道工場)、日本統治時代には台湾總督府鐵道部庁舎と鐵道工場があった場所です。現在博物館としてメインで利用されている建物は、日本統治時代の1920年に完成し、戦後は鐵道管理局として利用されてきました。台北駅が建て替えられ、鐵道管理局に移転したあと長い時間をかけて修復され、2020年から台湾博物館の分館、北門館(鐵道部園區)として公開されました。

学 び の ポ イ ン ト

1.

「北門」は新しい台湾の出発点

国立台湾博物館鐵道部園區は、台北駅の西側、台北メトロ北門駅のすぐ近くにあります。現在にはさらに桃園メトロの台北駅が道路を隔てた向かい側にあり、交差点を挟んだ反対側には、「北門」(承恩門)や台北郵便局があります。北門とは、かつて台北の街を取り囲んでいた城壁の正門で、清朝時代から現在まで保存されています。つまりこの地域は昔から台北の「入り口」だったのです。北門の周囲には、清朝時代から鐵道駅、機械工場、郵便局(現・台北郵便局)など新しい時代を象徴するさまざまな施設が造られ、日本統治時代、そして戦後へと引き継がれていきました。北門はかつて台湾の近代化の出発地点であり、北門館は百年にわたって時代の変化を見つめてきました。

2.

「時代」を動かした鐵道と台湾

鐵道は世界を大きく変えましたが、台湾も鐵道によって大きく変わりました。鐵道に乗って多くの人々がいろいろな場所へ出かけ、様々な物が台湾から世界へと、世界から台湾へとやって来ました。鐵道は世界を、人と人の距離を縮めていきました。台湾では、大陸と比較してもかなり早い段階で鐵道が建設されます。清朝で台湾を担当した知事であった劉銘伝は、洋務運動の一環として、北部の基隆から南部の打狗(高雄)まで台湾を縦断する鐵道を計画し、基隆から台北、その後新竹までを結びました。日本統治時代の1908年にこの南北を結ぶ鐵道が完成し、台湾の人々も徐々に鐵道を利用するようになります。この時代に台湾の鐵道を建設、運営した部門が台湾總督府鐵道部です。現在博物館となっている鐵道部の建物は1920年に完成し、戦後も台湾の鐵道を管理するための施設でした。その中で、100年にわたってたくさんの人々が台湾鐵道の未来を計画し、実行にむけて働いていました。

3.

百年の歴史を物語る貴重な歴史建築

国立台湾博物館鐵道部園區の最大の魅力は完成から100年を経た建築物で、3年という時間をかけて修復、公開されました。2007年には国定古蹟に指定されています。メインの庁舎は1階がレンガ造り、2階が木造で、主要な柱や梁にはすべて台湾南部の阿里山で伐採された台湾檜が使われています。外観はハーフティンバー様式でまとめられています。設計者の森山松之助は、東京帝国大学工科大学建築学科で、東京駅の設計者として知られる辰野金吾のもとで学び、1906年から1921年まで台湾で働きました。彼はほかにも台北州庁(現・監察院)や台中州庁(現・台中市政府)、台南州庁(現・国立台湾文学館)も設計しました。東京駅の駅舎や台湾の總統府はこれらの建物とほぼ同じ時期に造られましたが、どれも赤レンガと白い飾り石が目立つ美しい建築です。台湾博物館鐵道部園區には、鐵道部、鐵路管理局の庁舎だけでなく、八角樓(男子トイレ)、食堂、防空壕などが残されており、いずれも貴重な遺構です。この場所には清朝時代に、兵器や鐵道車両を製造、修理する工場があり、日本統治時代には1930年代まで鐵道工場がありました。園區内にはこれら工場の遺構も残されており、三つの時代にまたがって引き継がれてきた貴重な歴史的遺産を間近で見ることができます。